

屋山城ハンドブック



屋山の航空写真

屋山は豊後高田市都甲地区にある山で、屋根のような形をしているので「屋山」と呼ばれています。見る方向によって形が変化し、「八面山」^{はちめんざん}とも呼ばれています。

今からおよそ1300年前、八幡神の化身とされる「仁聞菩薩」^{にんもんぼさつ}によって国東半島中に28もの寺院がつけられました。その寺院の集まりを六郷満山といいます。屋山には長安寺が開かれ、中世においては六郷満山の中心として活躍しました。平安時代後期に彫られた太郎天像は、「童子」^{どうじ}と呼ばれる子どもの姿をしており、像の内部に書かれた多くの記録から、不動明王の化身だということが分かっています。^{ふどうみょうおう}

屋山の山頂には、屋山城跡があります。今からおよそ400年前に吉弘統幸^{よしひろむねゆき}という武将が、15才の若さで城を今の形につくりあげた事が古文書^{こもんじょ}の記録から分かっています。



長安寺の境内



木造太郎天像

屋山城主・吉弘統幸

屋山城主・吉弘統幸は、義に厚く、とても勇敢な武将であったと言われています。統幸が15才の時、父・鎮信を日向・耳川の戦い（現在の宮崎県川南町）で失った後、代々大友家の重臣の一族であった吉弘家をまとめあげました。

当時の国東半島の武士達は、河内の鞍懸城で起こった田原親貫の乱に苦しめられていました。統幸は敵の攻撃に耐えられるよう屋山城を改築し、乱の平定の戦でも活躍しました。

1600年、統幸は西軍についた主君・大友義統に従って、黒田官兵衛の大軍と、別府・石垣原で決戦します。統幸は義を貫きとおし、最期まで戦い抜きました。統幸の死に様を見て、敵も味方も統幸の勇敢さを称えたと言われています。



吉弘統幸の肖像画



金宗院の統幸の墓

屋山城を守る仕掛け

屋山城には、敵が簡単には侵入できないように、様々な仕掛けがつくられています。屋山城は険しい山の頂の尾根に沿って郭をつなげる「連郭式山城」と呼ばれる種類の城です。

城の入口付近には、長い塹堀がつくられて、道が細くなっており、敵は一行に並ばないと城を登ることができません。長い列になった敵を、上から大勢で攻撃したり、横から弓矢で狙い撃ちすれば、少ない人数でも敵を倒すことができる仕掛けです。城の入口は虎が口を開けたような場所でしたので「虎口」と呼ばれます。

城の中心を仕切る「堀切」は、城に侵入して勢いづいた敵を、堀の中に一度くぐらせて疲れさせたり、再度登る時に上から攻撃したりするための仕掛けです。



塹堀の間を歩く様子



堀切を渡る様子

屋山城からの眺望

戦国時代の山城は、敵が近づいていた時、すぐに分かるように、見晴らしの良い高台につくられました。屋山城は、^{どくりつほう}独立峰で周囲に視界を妨げるものがなく、^{さまた}周辺との高低差も大分県の山城では屈指であるため、非常に遠くまで見渡すことができます。

長岩屋の天念寺や、真玉の無動寺の岩峰も全体がよく見えます。下から見ると大きい、^{なめし}並石ダムや^{いのむれさん}猪群山も屋山城からだ、小さく見えます。天気がよければ、海まで見えるため、明治時代には大きな^{いしどうろう}石燈籠がつくられています。



屋山城の縄張図

